

観世又三郎と荒木村重

小林 健 二

観世又三郎は『近代四座役者目録』(以下、役者目録)に「宗彦弟也。九郎権守ノ弟子也。早太鼓得物也。似我時代ニウツ」とあるように、宗彦こと観世九郎豊次(彦右衛門)の弟であり、名人であった似我こと観世与左衛門国広と同時代の太鼓の打ち手であった。役者目録では、金春彦九郎権守の弟子とするが、永禄十二年と元亀三年奥書の国広から又三郎に相伝された太鼓伝書があることから、国広の教えも受けていたようである。

また、兄宗彦の名代として兄の師である宮増弥左衛門親賢に付いていたとも記される。弥左衛門が弘治二年(一五五六)に若狭で亡くなるまで付き従い、その時に十六歳であったとあるから、逆算して又三郎の生年は天文九年(一五四〇)ということになる。

永禄七年の観世元忠が興行した石橋勸進能に出演しており、また、『信長公記』の永禄十一年十月や天正元年七月の能の記事にも太鼓方として名前が見えることなどから、室町

後期にかなり活躍していた太鼓打ちであったことは間違いない。

さて、役者目録には、又三郎が荒木殿の被官であったとする、注目すべき記事がある。

事外分別者、其上、荒木殿内ニテ数度手柄ヲスル。サルニヨリ名字ヲヤリ、後荒木ヲ名乗、荒木惣兵衛ト云。家老ニ成、城代ナドヲスル。信長公・秀吉公モヨク御存ニテ、惣兵衛イキテイタラバ、荒木カヤウニナリ果マジキト被仰ルト也。太鼓タシナミタル人ニテ有。後ハ、荒木殿ニ計被居ル。

荒木殿とは、戦国末期の武将であった荒木村重のことである。村重は元亀年間に織田信長の麾下となり、天正二年には有岡城主となつて摂津国の守護となるが、後に信長に背いて没落する人物で、能や茶道にも通じた数寄者でもあった。

右の記事の如くに又三郎が村重に仕えていたとすると、両者の接点には兄である観世彦

右衛門が関わっていたことが考えられる。村重が宗彦の鼓の弟子であることは役者目録にも記される場所であるが、より直接的な関わりを示す資料として、元亀四年六月廿八日付の村重から彦右衛門に宛てられた書状があげられる(『観世新九郎文庫目録(上)』「能楽研究」二号)。これには合力(補助)のために「鳥養之内有富名半分」の所領を与える旨のことが記されており、この他にも、同年に村重家中の中川瀬兵衛等による同所領に関する書状が存していて、宗彦が村重の庇護を受けていたことを裏付けているのである。

村重が信長諸將のなかで頭角を表し、摂津の国で勢力を拡張していくのは、この元亀四(天正元年)あたりからであり、宗彦兄弟との結び付きが強くなったのもこの頃からと推測できよう。弟の又三郎が村重の臣下となったのも、その繋がりがあればこそなのである。ちなみに、村重と宗彦の関係は、村重が没落して道薫と称し、茶道の世界に入ってからも続いており、そのことは『今井宗久茶会記』天正十一年二月、道薫の振舞に宗彦・樋口石見が訪れて囃子を奏した記事などにより窺えるところである。

さて、又三郎は村重から名字をもらい、荒木惣兵衛を名乗ったとあるが、荒木氏の系図や『荒木略記』に当たっても、惣兵衛の名前

は出てこない。しかし、役者目録の幸四郎次郎の項に記される、塙備中(原田直政)が催した薪能に「宗兵衛」という太鼓打ちの名前が見え、字こそ違うものの、これが惣兵衛に改名した又三郎である蓋然性は高いと思われる。道叱が十八歳の時に見たというから、天正四年のことである。

また、又三郎が村重の家臣として働いていたことを示す資料も見出すことが出来た。尼崎市にある日蓮宗の古刹長遠寺に所蔵される文書の一つがそれである(『大日本史料・兵庫県史料編・伊丹資料叢書4荒木村重史料等』)。

先年任御朱印旨、法花寺内之儀、拙者為可申付、上使差下候、早々堀構之事、可被申付儀簡要候、委曲字保対馬守・観世又三郎申含候、恐々謹言

三月十五日 荒木村重(花押)
つつみ・いちにわ 年寄中

この書状は、天正二年に村重が辰巳・市庭(現尼崎市)の年寄達に法花寺(長遠寺の前身)の堀を構えるように命じたもので、委細は宇保対馬守と観世又三郎の二人に申し付けてあるのでそれに従うようにという内容である。

ここでは、又三郎は能役者としてではなく、村重の被官の一人として登場してくるのである。しかも、観世又三郎と明記されることから、天正二年の時点では惣兵衛と改名してい

ないことの証ともなる。

役者目録では「家老ニ成、城代ナドヲスル」と要職にあつたように書かれるが、右の書状からも荒木家中において有力な一員であつたことが想像出来るのである。

ともあれ、又三郎が能役者とはまた別の、村重の家臣としての顔を持っていたことは、当時の役者と庇護者の関係や待遇を考える上で興味深い点となる。

さらに、「信長公・秀吉公モヨク御存ニテ、惣兵衛イキテイタラバ、荒木カヤウニナリ果マジキ」と意味深長に記されるが、これは村重の信長に対する裏切りと没落が、又三郎の死と関係するかのよう書きぶりである。

又三郎の没年については今まで明らかでなかったが、表章氏が太鼓観世家の「天正五年閏七月二十五日付、太藏式介宛観世与左衛門国広書状」(『太鼓観世家蔵古書状類の紹介と解題』『能楽研究』十五号)に「然者又つ、けて又三郎死去仕候。無是非次第ニ候」という記事を紹介され、天正五年(一五七七)であることが認められた。天文九年生まれとすると享年三十七歳ということになる。

この又三郎の死の前後における荒木村重の行動を追ってみると、天正五年二月に信長が泉南・紀州雑賀の一向一揆と戦うのに従軍し、翌六年七月には秀吉の別所攻めに参戦してい

る。ところが、その十月に突如信長に反旗を翻し、これが村重の運命を一転させることとなった。

すなわち、その後、十一月には有岡城が秀吉ら信長諸將に攻められ、翌七年九月には単独で脱出して尼崎城に逃れるものの、十一月に有岡城は落城し、十二月に村重の女房だし殿をはじめとして主な一族は六条河原で処刑され、郎党は一類とも尼崎で惨殺されるのである。その数、五十二人とも伝えられる。

村重自身は生きながらえ、入道して道薫と称し、信長の死後は茶の湯をもって秀吉に仕えたが、一族を根絶やしにされるという悲劇を背負っていくことになるのである。

この村重の動向と又三郎の死を重ね合わせると、又三郎の死んだ天正五年を境にして、村重の信長への背叛とそれによる没落が始まっている。単なる偶然の一致かもしれないが、観世座の役者の中では、この村重の運命の転機を又三郎の死と関連づけて「惣兵衛イキテイタラバ、荒木カヤウニナリ果マジキ」と語られていたのである。

〔付記〕小稿は、能楽史研究会の『近代四座役者目録』の輪読で発表したもの的一部である。発表に関しては片桐登氏に種々御教示いただいた。記して深謝する次第である。

(大谷女子大学助教授)